



JSHCT Letter No.45

The Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

一般社団法人日本造血細胞移植学会

December 2011

発刊発行:一般社団法人日本造血細胞移植学会 発行責任者:今村 雅寛(理事長) 編集責任:一般社団法人日本造血細胞移植学会編集委員会 発行:2011年12月
〒461-0047 名古屋市東区大幸南一丁目1番20号 名古屋大学医学部内 TEL(052)719-1824 FAX(052)719-1828 http://www.jshct.com

第34回日本造血細胞移植学会総会のご案内

第34回日本造血細胞移植学会総会 総会会長 藺田 精昭
(関西医科大学大学院医学研究科幹細胞生物学)

第34回日本造血細胞移植学会総会を平成24年2月24日(金)～25日(土)の2日間に大阪国際会議場において開催させていただきます。今回は、「基礎研究から新しい移植医療の臨床応用へ“from the bench to the bed side”」を学会のテーマさせて頂き、造血幹細胞の基礎研究にもスポットライトを当てるように考えました。総演題数は、公募、企画等を合わせて591演題と過去最高となりました。会員の皆様の温かいご支援に対しまして、心より御礼申し上げます。

総会のハイライトとして、特別講演2題(Prof. Mariusz Z. Ratajczak, Prof. Tsvee Lapidot)を企画しており、Ratajczak教授には組織幹細胞(VSEL)、Lapidot教授には造血幹細胞のホーミングに関連するupdateな研究成果をご発表頂きます。また、国内で実施された臍帯血移植が1,000例を超えたことから、Presidential Symposiumとして、“Cord blood stem cell transplantation(CBSCT): from the bench to the bed side”を企画しました。本シンポジウムでは、Hal Broxmeyer教授の“New insight into CBSCT”と題したKeynote lectureを皮切りに臍帯血に由来する幹細胞の基礎的研究と臍帯血移植のupdateな臨床成績までを含めた発表を予定しています。この他、特別企画シンポジウム「放射能被曝と人体への影響—過去、現状、今後—」、日本再生医療学会との合同シンポジウム「造血幹細胞移植の未来」を企画しました。また、最近の総会では行われていなかった教育講演を復活させ、基礎系、臨床系の講演を合わせて11題企画しました。内容も、医師だけでなく、移植医療に携わる看護師にも分かりやすい講演にしたいと考えています。また、幹細胞の基礎研究や移植臨床において重要なテーマについては、企画ワークショップを9セッション予定しています。これ以外の新しい企画として、全公募演題からプログラム委員会で優秀演題を選び、プレナリーセッションで英語発表して頂きます。最近、全国的に移植医療を目指す若い医師が減っています。そこで、本総会では学会初日に初期研修医・医学生セッションを企画したところ全国から16演題

目次

第34回日本造血細胞移植学会総会のご案内	1-2
第33回日本造血細胞移植学会総会学術奨励賞の報告	3
平成23年度第一回CTC研修会報告	3
国際委員会報告	4
第16回アジア太平洋造血細胞移植学会総会報告	
16 th Annual Meeting of Asia-Pacific Blood and Marrow Transplantation Group	4
The 1 st International Workshop on Hematopoietic Stem Cell Transplantation in Emerging Countries (ベトナムワークショップ2011)のご報告	4-5
看護部会企画「学会総会「看護部会教育セミナー」「移植看護グループミーティング」へのお誘い」	6
私の選んだ重要論文	6
施設紹介「札幌北楡病院 血液内科」	7
会員の声「近藤咲子」	8
編集委員会からのお知らせ	8

の応募がありました。本セッションは口演発表として、評価委員により優秀演題を選考し、翌日の総会で会長から表彰したいと考えております。

総会では、サイエンティフィックな議論で盛り上がり、また、学会初日の記念コンサート、懇親会ではリラックスした時間をお楽しみ頂きたいと考えています。記念コンサートでは、フルート奏者の寺本純子さん、ピアニストの高木 梢さんをお招きしています。是非とも、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

【主なプログラム】

1. 特別講演

Prof. Mariusz Ratajczak (USA)

“Very Small Embryonic Like Stem Cells – an update”

Prof. Tsvee Lapidot (Israel)

“The Essential Roles of SDF-1/CXCR4 Interactions in Human Hematopoietic Stem and Progenitor Cell Homing and Mobilization”

2. 会長シンポジウム：“Cord blood stem cell transplantation (CBSCT): from the bench to the bed side”

Chairman Yoshiaki Sonoda (Kansai Medical University)

Kiyoshi Ando (Tokai University School of Medicine)

1) Hal Broxmeyer (Keynote lecture “New insights into CBSCT”)

2) Yoshiaki Sonoda (A novel model of human hematopoietic stem cell hierarchy)

3) Kyung-Sun Kang (Universal stem cells from human umbilical cord blood and its applications)

4) Hiroyasu Ogawa (Intra-bone marrow transplantation of unwashed cord blood using reduced-intensity conditioning treatment)

5) Shuichi Taniguchi (CBSCT: An update in Japan) (tentative)

3. 特別企画シンポジウム：「放射能被曝と人体への影響 – 過去、現状、今後 –」

座長 宮村 耕一 (名古屋第一日赤)

千葉 滋 (筑波大学大学院)

1) 前川 和彦 (緊急被ばく医療—東海村臨界事故、福島第一原発事故、そして急性放射線症候群をめぐる話題)

2) 宮崎 泰司 (広島・長崎 中等度被ばくの長期間の影響)

3) 井関 徹 (東海村事故の高線量被ばく症例に対する臍帯血細胞移植を含む治療)

4) 谷口 修一 (福島の実状と虎ノ門病院における自家造血幹細胞保存)

5) Prof. Dennis Confer (Radiation exposure, medical countermeasures and treatment)

6) 宮村耕一 (現状認識と今後のコンセンサス形成に向けて)

4. 再生医療学会との合同シンポジウム：「造血幹細胞移植の未来」

座長 辻 浩一郎 (東京大学医科学研究所)

赤司 浩一 (九州大学大学院)

1) 大津 真 (Myeloablationを必要としない造血幹細胞移植法の確立に向けて)

2) 翁 家 (間葉系幹細胞とIL-21シグナル遮断を利用した急性GVHDに対する新規治療戦略の開発)

3) 高橋 義行 (ウイルス特異的CTL療法)

4) 丸本 朋稔 (マームセット・ヒトES/iPS細胞への遺伝子導入による造血幹細胞分化系の確立)

5) 山崎 聡 (ES/iPS細胞から誘導した造血幹細胞によるXSCIDの治療モデル)

5. 看護シンポジウム：「急性GVHDの看護」

座長 荒木 光子 (国立がん研究センター中央病院)

西村 祐子 (関西医科大学付属枚方病院)

看護セミナー：「移植後の晩期障害」

座長 山花 令子 (東京大学医科学研究所附属病院)

中宗根秀樹 (自治医科大学さいたま医療センター)

第33回日本造血細胞移植学会総会学術奨励賞の報告

第33回日本造血細胞移植学会総会 総会会長 原 雅道

平成23年3月9日、10日に開催されました第33回日本造血細胞移植学会における学術奨励賞を発表致します。プログラム委員、座長の採点をもとに、下記5名の学術奨励賞受賞が決定しました。

- LIndex:造血幹細胞移植後のリンパ球減少の程度と持続期間の両者を同時に評価する新しい指標の提案
木村俊一先生 他 自治医科大学附属さいたま医療センター血液科
- 未分化造血幹細胞の支持能を持つヒト骨髄由来間葉系幹細胞の予期的分離とその機能解析
松岡由和先生 他 関西医科大学大学院医学研究科幹細胞生物学
- 臍帯血は免疫抑制剤早期減量が可能な移植ソースである
天野逸人先生 他 奈良県立医科大学 内科学第二講座
- JALSG AML201 研究におけるAML with t(8;21)の同種造血幹細胞移植成績
瀬戸愛花先生 他 名古屋第一赤十字病院血液内科
- CUDBAS (Curriculum Development Method Based on Ability Structure) を用いた造血幹細胞移植看護教育プログラムによる移植看護自律度の変化
横田宜子先生 他 原三信病院看護部

授賞式は平成24年2月に開催されます第34回日本造血細胞移植学会総会(大阪)の総会時に行います。受賞者をご出席をお願い致します。

平成23年度第1回CTC研修会報告

クリニカル移植コーディネーター委員会委員長 秋山 秀樹

11/12 - 13日、駒込病院にて平成23年度CTC研修会が開催されました。

受講者35名。うち看護師26、臨床検査技師2名、その他7名で、北海道から九州までの各地より参加されました。各所属施設において移植症例のCTCとしての経験のあることが参加条件であるため、多くの方がGVHDの臨床やBM採取も見学した経験があるなど、レベルの比較的高い内容となりました。写真は修了証書授与後のものですが、都合により1名写っておりません。あしからず。



国際委員会報告

国際委員会委員長 岡本真一郎

国際委員会メンバーは、10月にSidneyで開催されたAPBMTの年次総会、11月にIncheonで開催されたAsian Symposium on Cord Blood Transplantation, そしてHanoiで開催されたWBMT/WHO主催のThe 1st International meeting on Hematopoietic Stem Cells Transplantation in Emerging Countriesに参加し国際交流に貢献しています。Hanoiでのmeetingに関しては、その開催に尽力された学会会長から詳細な報告があると思いますが、開発途上国にどのようにして移植医療を育んでいくかという大変ユニークな会議で成功裏に終わりました。APBMT年次総会は次回2012年10月26-28日インドのChennaiで開催されます。学会員の方々の積極的な参加をお願いします。

第16回アジア太平洋造血細胞移植学会総会報告

16th Annual Meeting of Asia-Pacific Blood and Marrow Transplantation Group

APBMT事務局 国際委員会委員 飯田美奈子

一年の経つのは早いもので、つい先日、昨年プーケットで行われた第15回APBMTの報告をしたと思ったら、もう「第16回の記事を書いてね!」との御依頼・・・

と、ということで2011年10月30日～31日オーストラリア・シドニーで開催された第16回APBMTをレポートします。今回はAPBMTを含む5つの学会の合同開催であり、APBMTへの参加人数も700名を越す過去最大規模となりました。会場のSydney Convention & Exhibition CentreはDarling Harbourに面し、無料バスで数分行けば、かの有名なOpera HouseとHarbour Bridgeが一望できるという、昨年のプーケットに負けないくらい風光明媚な場所。「APBMTはどうしていつもそんなにいい場所(!)で開催されるの?」という質問をされることがありますが、まさにそのとおり。初夏のシドニーのこうした素晴らしい環境のもと、各国からの参加者とともに有意義な各種会議・研究発表・討論が行われました。特記すべき事項として、1) Business Meetingで6つのStanding Committeeの設立が承認された2) Outcome Registryが順調に各国の協力を増やし事業を展開中3) 各WGのin-person meetingにおいてAPBMTとしての国際共同研究の骨格が示された、など多くの成果が得られました。(詳細はAPBMTのHP (<http://www.apbmt.org>) をご参照ください。)今回、日本からは6つの口演と11のポスター発表があり、安城更生病院の渡邊慶介先生は”Allogeneic Hematopoietic Stem Cell Transplantation for CAEBV”の発表でBest Poster Presentationの第1位に選ばれました。

次回のAPBMTは2012年10月26日～28日インドのチェンナイで開催されることが決定し、さらに2013年はベトナム・ホーチミン、2014年は中国・杭州にて開催が予定されています。APBMTは今年、ミャンマー・バングラディッシュ・モンゴルの3カ国を新たに参加国に加え19カ国になり、今後EBMT・CIBMTRと並ぶWBMTの主要なメンバーとしても活動の場を広げていきます。引き続き日本の造血細胞移植学会の皆さまの数多くの御参加をお願いいたします。

The 1st International Workshop on Hematopoietic Stem Cell Transplantation in Emerging Countries (ベトナムワークショップ2011)のご報告

APBMT理事長、WBMT副理事長
国際委員会アドバイザー 小寺 良尚

先に一度ご案内したWBMT (Worldwide Network for Blood and Marrow Transplantation), WHO, NIHBT (National Institute of Hematology and Blood Transfusion, Hanoi) 共催の、“新興国のための

Vietnam Workshop 2011”は予定通り2011年11月10～12日、Hanoiで開かれました。WHOにより提案されたのが2008年でしたからほぼ3年前、その後EBMT、Tandem Meeting等の機会を利用するとともに、一月に一度の国際電話会議で計画を固めてまいりました。略固まったのが2011年2月のHawaiiで開かれたTandem Meetingの時のWBMT Business Meeting。しかしながらその後我が国は3.11東日本大震災



に見舞われ、アジアで開かれるWSだから、APBMTが、APBMTの中心は日本だから日本が頑張ってくれるであろう、というそれまでの目論見は大きく揺らぎ、一時は欧米勢の方が先に弱気になってしまったのですが、お互いに励ましあいながら何とか開催にこぎつけました。2011年7月になって財政上のめどがついた時には、“シャンパンものだ”と言って皆喜び、それからは積極的な案が次々と出るようになりました。震災直後の苦しい中、海外でのWSでしたが、困難な中でも国内の多くの関連企業から寄付を頂きまして、日本の底力と困難の中でも学術的なものを大切に続ける社会の成熟度を実感した次第です。参加者は海外からの講師、座長、新興国代表が約60名、ベトナム国内参加者が約230名、計3日間で290名という、予想の2倍近い参加者数という盛況ぶりでした。特にベトナム以外の新興国として、モンゴル、バングラデシュ、ミャンマー、フィリピン、インドネシアそしてアジア以外からはブラジル、コンゴ、ナイジェリアの代表が参加してくれました。APBMT参加国からは、中国、台湾、シンガポール、インド、オーストラリア/ニュージーランド、日本、CIBMTRからは米国、カナダ、EBMTからはドイツ、英国、フランス、スイス、オーストリア、ハンガリーそしてWHOが参加し、それぞれ講師、座長としての役割を果たしていました。開会式典にはベトナム厚生労働大臣も参加し盛大。WSは全てプレナリー形式で行われましたが、“この会議の主役はあなた方参加者全てである”という会の初めの言葉を皆十分に受け止め、各講演後の討論は活発でした。WSのテーマは1) 造血幹細胞移植をいかに始めるか、2) 移植の適応、3) ドナーの選択(ドナーバンクを含む)、4) 幹細胞の処理(臍帯血バンクを含む)、5) 症例登録の重要性、6) 普及啓発活動の在り方、7) 移植・採取センター等の基準、でしたが、ベトナムをはじめこれから移植を始める国にとって、移植専門チームを如何に育てるか、幹細胞ソースをどこに求めるかが最大の関心事のようで、前者における留学先等の打診、後者においては臍帯血移植やHLA-1-ハプロ不適合移植、その前段階であるHLA検査体制に質問が多く見られました。上記新興国の代表はいずれも造血幹細胞移植に対する熱意の感じられる働き盛りの人たちばかりで、モンゴル、バングラデシュ、ミャンマーともAPBMTの仲間入りを表明し(フィリピン、インドネシアは既にメンバー、APBMTは合計19カ国/地域となりました)、一部に我が国、韓国、ドイツ等へ研修の申し入れがあったと聞いています。CIBMTR、EBMT所属の多くの国にはビザが要求されるベトナムへは初訪問の海外講師も多く、彼らからはそのことも含め“エキサイティングであった”との声が多く聞かれました。今回の準備に当たってはベトナムの医療チームと共同事業をしたわけですが、一年以上の工程で彼らの仕事ぶり“決定までには極めて時間をかけ、決定後は電光石火で行動、完成へ持って行く”を体感しました。今回こちらが“give”したものが何であったかは向こうに聞くこととして、“take”したものが何であったかと言えば、小生にとって一つはNIHBTが優秀な血液センターとしての実績を生かす形で造血幹細胞ドナーバンクを造ろうとしている計画性で、改めて我が国のバンクももうひと頑張りしなければ、という刺激と、もう一つはモンゴルの駐ベトナム大使まで動員した国を挙げての造血細幹胞移植開始のための熱意であって、要は新たなエネルギーをもらったということでしょう。WSの詳細はWBMT HP (<http://www.wbmt.org>、学会HPにもリンク)をご覧ください。次回は再来年、ラテンアメリカ(ブラジル)又はアフリカ地区(サウジアラビア)等が開催候補地に挙がっています。以上、Next generationの企画段階からの参画を期待して報告いたします。

学会総会「看護部会教育セミナー」「移植看護グループミーティング」へのお誘い

看護部委員会副委員長

国立がん研究センター中央病院看護部 森 文子

本学会看護部会では、「造血細胞移植を含む造血器腫瘍疾患看護にかかわる看護師のクリニカルラダー」を作成し、学会ホームページでも公開しています。このクリニカルラダーでは、移植看護に必要な知識・技術に関連した学習項目を網羅的に取り上げています。経験を積み重ねながら段階的に知識・技術を習得していく目安を示し、その参考となる図書や文献も提示しています。各施設の人材育成のための教育計画立案や看護実践能力の評価に、このクリニカルラダーが役立てられるように、今後は、基本的知識の習得と看護実践のための看護手順テキストを作成していく予定です。

看護部会では、移植看護にかかわる看護師の学習をサポートできるように、第30回学会総会時より、このクリニカルラダーの学習項目に基づいた教育セミナーを開催しています。移植医療や看護の歴史・変遷からスタートし、感染管理、血液疾患(白血病)と治療、化学療法看護、口腔ケア、GVHD、スキンケアなど、これまで様々なテーマについて、経験と最新知識にあふれた先生方にご講演いただきました。このセミナーは、移植看護にかかわる看護師全ての方に参加していただけますが、対象設定を「ラダーレベルⅡ(一人前)」としています。「ラダーレベルⅡ(一人前)」とは、移植看護経験2～3年目程度の看護師で、関連する知識について理解し看護ケアを正しく実践すること、その根拠やアセスメントを述べること、ガイドラインや知識を活用して看護展開できることを目指すレベルです。各施設の人員構成や人事異動などの条件を考慮し、移植看護経験2～3年目程度の看護師が、日々の実践や今後の後輩育成に役立てられるセミナーとなるようにしたいと考えています。

第34回日本造血細胞移植学会総会では、「移植後晩期合併症」をテーマに取り上げました。講師は、自治医科大学附属さいたま医療センター血液科の仲宗根秀樹先生です。様々な臓器障害、二次がん、性機能障害や不妊対策などについて、看護実践に必要な知識を得ていただければと思っています。

また、今回の学会総会では、「移植看護グループミーティング」の開催を予定しています。米国で開催されているBMT Tandem Meetingの看護セッション内のプログラムを参考に計画しました。グループ毎のテーマは、前述のクリニカルラダーの項目をもとに設定し、移植看護経験豊富な看護部会委員がファシリテーターとなり、ディスカッションをサポートします。施設の枠を越えて、看護師同士で情報交換し、ディスカッションする機会が充実するよう、準備を進めています。参加登録方法などは、総会案内や学会ホームページをご参照ください。たくさんの看護師のみなさまの参加をお待ちしております。

私の選んだ重要論文

- 1) E. Donnell Thomas, et al.: Bone-marrow transplantation (two parts). N. Engl. J. Med. 292: 832-43, 895-902, 1975
- 2) E. Donnell Thomas, et al.: One hundred patients with acute leukemia treated by chemotherapy, total body irradiation, and allogeneic marrow transplantation. Blood. 49: 511-33, 1977
- 3) Peter j. Tutschka, et al.: Bone marrow transplantation for leukemia following a new busulfan and cyclophosphamide regimen. Blood 70: 1382-88, 1987

本企画の趣旨に反するかもしれないが、まず近代的移植の出発点となった1)をあげたい。私は1984年より造血細胞移植に携わっているが、当時移植マニュアル的な成書はほとんどなくこの論文を頼りに、決死の覚悟で骨髄移植に臨んでいたことが思い出される。Thomas先生はその後ノーベル賞を受賞され、本著はまぎれもなく今日の造血細胞移植の原点であり、若い先生に是非一読をお勧めする。また若くない先生にも読み返すたびに新しい発見があると思う。造血幹細胞移植の進歩が一段落した感のある現在、原点を見つめなおし今後の我々の方向性を再検討すべき時期であろう。

次の2)もThomas先生のSeattleでの初期の進行期急性白血病100症例の成績であり、5年生存率約13%と報告されている。それから約35年が経過したが、非寛解期白血病の5年生存率は本学会の平成22年度全国調査報告書によると、各幹細胞源で10～25%程度であり成績の向上はごくわずかである。確かに支持療法の進歩、RICの導入、幹細胞源の多様化により移植の対象患者は飛躍的に増大したが、移植の原点であるはずの再発難治白血病に対する同種移植の遅々たる歩みには愕然とせざるを得ない。今後我々の英知を集結し改善を図っていかねばならない。

最後に3)は1987年に発表された、いわゆるlittle BU+CYの原著である。CY+TBIに匹敵する非TBI regimenとして大きな注目を集め、現在に至るまで移植前処置の大きな流れとなった。論文発表後まもなくして開催された第11回骨髄移植研究会(金沢)で早速数施設より症例報告があり、質問が集中し白熱の議論となったことが思い出される。

あの頃の熱気をこの学会にもう一度取り戻したいものである。

島根県立中央病院血液腫瘍科 吾郷 浩厚

施設紹介

札幌北楡病院 血液内科

今井 陽俊

札幌市は、人口190万人を超え全国5番目の都市になりました。石狩平野の南西部に位置する札幌市は、夏はさわやかな暖かさで過ごしやすく、冬は積雪寒冷のためウインタースポーツが盛んで、四季の移り変わりを楽しむことができる街です。札幌のおすすめスポットは、大通公園、赤れんが(北海道庁旧本庁舎)、札幌市時計台、札幌羊ヶ丘展望台、大倉山展望台、札幌テレビ塔、JRタワー展望台、北海道大学、モエレ沼公園、白い恋人パークとすすきのです。ラーメン、ジンギスカン、すし、海鮮などの食事もおすすめです。



札幌北楡病院は、1985年1月に現在会長である川村明夫先生が中心となり開設されました。高度先進医療を日常医療へ還元することを病院の理念として人工臓器移植研究所が併設されました。開設当時の医師は外科医4名、内科医1名、整形外科医1名の計6名でしたが、血液内科は現在名誉院長である笠井正晴先生が、内科の担当と同時に立ち上げられ、1年間で同種骨髄移植の施行を可能としました。精力的な姿勢が求心力となり、血液内科とくに造血幹細胞移植治療を志す医師に人気となり、血液内科医が集まりました。笠井正晴先生は2010年4月に名誉院長となりましたが、現在血液内科では、血液専門医6名を含めて、道内だけではなく全国からの血液専門医志望の後期研修医を合わせて13名が診療に携わっています。

病院開設から20年間で、血液疾患では、急性骨髄性白血病417名、急性リンパ性白血病134名、骨髄異形成症候群176名、慢性骨髄性白血病167名、ホジキンリンパ腫76名、非ホジキンリンパ腫601名、多発性骨髄腫192名などが入院治療を受けています。造血幹細胞移植は、1991年から2009年までに実施された移植件数は623例で、最近では年間で40ないし50例施行しています。札幌市内だけではなく、道内、時には道外から血液疾患の症例の紹介を受けています。231床の病院ですが、血液内科の病床数は100を超えています。病床はすべて個室でしかも差額ベッド代は無料という前代未聞の偉業を成し遂げています。無菌治療室は30床あり、嚴重な感染対策を行っています。

日本骨髄バンク移植、採取認定施設であり、骨髄バンクドナーからのドナーリンパ球輸注療法(DLI)認定施設でもあり、臍帯血移植の認定施設にもなっています。全国の臨床研究の共同施設となっており、厚生労働省の移植研究班、日本成人白血病研究グループ(JALSG)および日本臨床腫瘍グループ(JCOG)に属しています。形態も個人病院より医療法人さらに社会医療法人へと変遷しています。遺伝子治療研究所も併設され、病院開設以来の理念が受け継がれています。

造血幹細胞移植治療では、他の診療科との連携が重要となります。院内各部門の多面的なサポートが重要で、特に医療連携室、療養情報センターでは、移植コーディネーターが、入院生活、医療費、社会保障制度や社会福祉制度などさまざまな問題点についての支援を行っています。医療情勢、社会情勢の変化に対応して、さらに発展することを常に心がけています。

会員の声

移植患者のリハビリテーション

慶應義塾大学病院 近藤 咲子

患者会の幹事会で元患者さんにお会いすると、最近移植する患者さんは元気だと言われます。確かに、患者会の集まりに比較的移植して間もない方の出席があるように思います。2002年に導入したリハビリテーションシステムが効果的に働いていると実感します。今では、当たり前になった造血細胞移植患者のリハビリテーションではありますが、導入するには、いろいろな抵抗と困難さが伴いました。なぜならば、造血細胞移植という大変な治療をすることだけでも大変なことなのに、その患者に対して何をやらせるのかという批判を患者さんやご家族からいただきました。しかし、造血細胞移植後のQOLの調査でも身体的なスケールの低下や筋力低下のために退院できない患者さんを見るたびに、何とかしたいという思いと造血細胞移植患者がリハビリテーションをする効果を説明しながら理解していただけるよう繰り返し説明しながら、働きかけていった経緯があります。しかも当初は入院してから依頼を出すことになっていましたので動機付けが十分でなく協力が得られにくいということもあり、動機付けるためにはもっと前の、造血細胞移植が決定したときからリハビリテーションが必要であることを医師の説明に含めたことで、この病院で造血細胞移植するためには必要なことであるという患者・家族の認識も高まり、批判も少なくなりました。そして、入院して周囲の患者さんのお互いの頑張りが刺激しあい、連れあいなながらリハビリテーションに楽しそうに向かう姿が見られるようになってからは、まるで当たり前のようにリハビリテーションが行われるようになりました。その頃、造血細胞移植患者が機能障害・廃用症候群になった場合はリハビリテーションをすることはありましたが、予防の観点からずっと関わっていくということは、リハビリテーション科も前例があまりない取り組みでしたが、こちらの提案をよく引き受けてくれ、とても協力的に連携できるようになっていきました。これは大学病院という環境がよいほうに働いたと今は感じています。

編集委員会からのお知らせ

編集委員会では、現在、来年3月の学会誌創刊に向けて、鋭意準備を進めているところです。つきましては、以下の2点につきまして、ご協力をお願い申し上げます。

1. 学会誌のウェブサイトのバナーを募集しております。12月31日が締め切りとなっておりますので、振るってご応募下さい。(募集要項はホームページ上に掲載しております。)
2. すでにご連絡いたしましたように、学会誌の論文を募集しております。募集要項はホームページ上に掲載されておりますので、多くの論文を投稿いただけますよう、お願い申し上げます。

編集委員会委員長 辻 浩一郎

● 会員メーリングリストについて

全会員を対象とした会員メーリングリストが発足いたします。
ご登録メールアドレスの変更等がございましたら事務局までメールにてお知らせ下さい。

【事務局より】

2011年12月1日

2012年全国調査 台帳登録のご案内

1. 2011年 全国調査「本登録」ありがとうございました

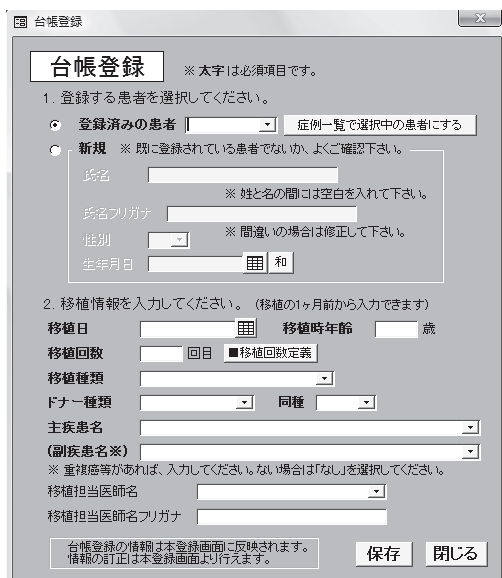
日ごろは、日本造血細胞移植学会全国調査にご協力をいただきありがとうございます。本年度も成人・小児施設共に、「本登録」にご協力いただきましたご施設の皆様には大変お手数をお掛けしました。お忙しい中でのデータのご入力、ご提出をいただきまして、誠にありがとうございました。2011年9月30日締め切りにて、登録をいただきました施設は、成人施設197施設、小児施設86施設です。

今後より正確な移植件数と、移植成績の把握に努めて参りたいと考えております。今後ともご協力の程、何卒よろしくお願いたします。

2. 2012年 台帳登録のご案内

施設での前年の移植件数を把握する為の必要最低限の項目を登録していただく、台帳登録の時期が近づいてまいりました。

**** 2011年(2011年1月から12月まで)に貴施設で行なわれました全ての造血幹細胞移植症例をご登録下さい ****



移植登録一元管理プログラム (TRUMP) の「台帳登録画面」(1症例あたり1ページのみ)にご入力の上、提出データを郵送もしくはWebにてデータセンターへご提出願います。データ作成はTRUMPの「ファイルへの書き出し」の中にある「学会提出データ」ボタンを用いて下さい。

***** 提出期限 2012年2月10日まで *****

お忙しいとは存じますが、移植施設における移植件数を把握する為の大切な登録でございます。入力は基本的な項目のみで1症例につき僅かです。何卒よろしくお願いたします。

尚、昨年までご記入・ご提出をいただいていた、「移植件数調査票」につきましては、昨年度お知らせしました通り本年度より台帳登録と一体化となり、別途の提出は不要となります。

※骨髓移植推進財団、日本さい帯血バンクネットワークを介した移植を行なわれているご施設におきましては、施設認定の更新の為に台帳登録の提出が必須となりますので、必ずご提出ください。

また、今後学会の「全国調査報告書」には、本登録のみならず台帳登録の実績も掲載する予定であるほか、データ利用・ワーキンググループへの参加の際の条件とすることも考えられています。